

- Best, N.R., Rees, M.P., Barlow, D.A., Cowen, P.J., 1992. Effect of estradiol implant on noradrenergic function and mood in menopausal subjects. *Psychoneuroendocrinology* 17, 87–93.
- Carr, V., Edwards, J., Prior, M., 1988. Urinary MHPG, platelet 3H-imipramine binding and symptomatology in depression: an exploratory study of clinical heterogeneity. *Biological Psychiatry* 23, 560–574.
- Del Rio, G., Velardo, A., Zizzo, G., Avogaro, A., Cipolli, C., DellaCasa, L., Marrama, P., McDonardo, I.A., 1994. Effect of estradiol on the sympathoadrenal response to mental stress in normal men. *Journal of Clinical Endocrinology and Metabolism* 79, 836–840.
- Drebing, C.J., Freedman, R., Waldo, M., Gerhardt, G.A., 1989. Unconjugated methoxylated catecholamine metabolites in human saliva. Quantitation methodology and comparison with plasma levels. *Biomedical Chromatography* 3, 217–220.
- Forsman, L., Lundberg, U., 1982. Consistency in catecholamine and cortisol excretion in males and females. *Pharmacological Biochemical Behaviour* 17, 555–562.
- Goldberg, D.P., 1972. The detection of psychiatric illness by questionnaire. In: A technique for the identification and assessment of non-psychotic psychiatric illness. (Maudsley Monographs No. 21), Oxford University Press, London.
- Goldberg, D.P., Hillier, V.F., 1979. A scaled version of the General Health Questionnaire. *Psychological Medicine* 9, 139–145.
- Leckman, J.F., Maas, J.W., Redmond, D.E., Heninger, G.R., 1980. Effects of oral clonidine on plasma 3-methoxy-4-hydroxyphenylglycol (MHPG) in men: Preliminary report. *Life Science* 26, 2179–2185.
- Li, G.Y., Ueki, H., Kawashima, T., Sugataka, K., Muraoka, T., Yamada, S., 2004. Involvement of the noradrenergic system in performance on a continuous task requiring effortful attention. *Neuropsychobiology* 50, 336–340.
- Muscettola, G., Potter, W.Z., Pickar, D., Goodwin, F.K., 1984. Urinary 3-methoxy-4-hydroxyphenylglycol and major affective disorders. A replication and new findings. *Archives of General Psychiatry* 41, 337–342.
- Odink, J., Van der Ploeg, H.M., Van den Berc, G.M.J., Van Kempen, G.M., Bruinse, H.W., Louwerse, E.S., 1990. Circadian and circatrigintan rhythms of biogenic amines in premenstrual syndrome (PMS). *Psychosomatic Medicine* 52, 346.
- Pliszka, S.R., Rogeness, G.A., Medrano, M.A., 1988. DBH, MHPG and MAO in children with depressive, anxiety and conduct disorders: relationship to diagnosis and symptom ratings. *Psychiatry Research* 24, 35–44.
- Reuster, T., Rilke, O., Oehler, J., 2002. High correlation between salivary MHPG and CSF MHPG. *Psychopharmacology (Berl)* 162, 415–418.
- Roy, A., Jimerson, D.C., Pickar, D., 1986. Plasma MHPG in depressive disorders and relationship to the dexamethasone suppression test. *American Journal of Psychiatry* 143, 846–851.
- Scatton, B., Loo, H., Dennis, T., Benkelfat, C., Gay, C., Poirier-Littre, M.F., 1986. Decrease in plasma levels of 3,4-dihydroxyphenylethyleneglycol in major depression. *Psychopharmacology (Berl)* 88, 220–225.
- Sevy, S., Papadimitriou, G.N., Surmont, D.W., Goldman, S., Mendlewicz, J., 1989. Noradrenergic function in generalized anxiety disorder, major depressive disorder, and healthy subjects. *Biological Psychiatry* 25, 141–152.
- Uhde, T.W., Boulenger, J.P., Post, R.M., Siever, L.J., Vittone, B.J., Jimerson, D.C., Roy-Byrne, P.P., 1984. Fear and anxiety: relationship to noradrenergic function. *Psychopathology* 17 (Suppl. 3), 8–23.
- Yang, R.K., Yehuda, R., Holland, D.D., Knott, P.J., 1997. Relationship between 3-methoxy-4-hydroxyphenylglycol and homovanillic acid in saliva and plasma of healthy volunteers. *Biological Psychiatry* 42, 821–826.
- Yamada, S., Yamauchi, K., Yajima, J., Hisadomi, S., Maeda, H., Toyomasu, K., Tanaka, M., 2000. Saliva level of free 3-methoxy-4-hydroxyphenylglycol (MHPG) as a biological index of anxiety disorders. *Psychiatry Research* 93, 217–223.

在宅高齢者の「かなひろいテスト」成績の経時変化

渡辺 至<sup>1)</sup> 小島 直樹<sup>2)</sup> 岩谷 トモ子<sup>2)</sup> 川島 敏郎<sup>1)</sup> 國武 裕<sup>1)</sup> 菅高一博<sup>1)</sup> 原岡  
一馬<sup>3)</sup> 立石 哲也<sup>1)</sup> 山田 茂人<sup>1)</sup>

1 佐賀大学医学部精神医学講座

2 社会福祉法人伊万里敬愛会

3 久留米大学院心理学教室

849-8501 佐賀大学医学部精神医学講座 佐賀市鍋島 5-1-1

過去 8 年間に老人健康教室に参加し「かなひろいテスト」(KANA) と Mini Mental State Examination (MMSE) を経時的に評価されている 65 歳以上の在宅高齢者 507 名を対象に、両テストの認知症のスクリーニング法としての有用性を検討した。初回に測定した KANA 得点と MMSE 得点には有意な正の相関が認められた ( $r=0.44, P<0.0001, n=314$ )。また過去 10 年間に 4 回以上 KANA を施行された 73 名と MMSE を施行された 8 名についてテスト成績の経時変化を検討すると KANA の成績は初回と比べて 3 回目と 4 回目の時点で有意な改善が認められた ( $F(3,74)=22.5, P<0.001$ )。一方、MMSE 得点は初回に比べ有意ではないが漸次減少していた。以上の結果から KANA は初回施行におけるスクリーニング法として有用であるが、3 回以上繰り返すと学習効果が認められ知的機能の経時的な変化の評価には不適當であることが示唆された。

<はじめに>

来るべき超高齢化社会に向けて、認知症予防の取り組みが各地で行われている。認知機能の評価には一般に Mini Mental State Examination (MMSE) や長谷川式スケールが用いられているが、対面質問形式で行われるため被験者の精神的負担も大きく、多人数を対象としたスクリーニングには不向きである。そこで認知症の一次スクリーニングのための様々なテストバッテリーが検討されている<sup>7)</sup>。その中で金子が開発したカナひろいテスト (KANA) は全て平仮名で書かれている昔話の筋を追いながら、「あいうえお」の文字を拾い上げていくという課題であり、被験者の施行に対する抵抗も少なく、2 分間で集団を対象に作業記憶の程度を評価出来る点で認知症のスクリーニングテストとして注目されている検査である<sup>4), 5), 6)</sup>。これまでの高齢者を対象とした KANA を用いた研究では積極的な日常生活習慣を持つ人が高得点を示すという研究や<sup>10)</sup>、パーキンソン病患者の P300 潜時と KANA 得点に有意な相関を認めた研究<sup>2)</sup> などがある。一方、執筆に関係した

趣味を持つ事や高学歴で高得点となるが、Kohs 立方組み合わせテストのほうが前痴呆状態を判別するのに有用であるという報告 12) もあり、KANA の有用性についての評価はさだまっていない。また繰り返し施行した場合の学習効果についての検討がなされていない。平成 2 年より K 町の有志によって同町在住の 65 歳以上の高齢者を対象に KANA および MMSE による知的機能検査と MRI による脳形態の関連に関する研究が開始された。その後、知的機能の低下の実態の把握とその予防のための地域の支援システムを作る試みがなされてきた。初期の検討で初回測定 of KANA の成績と MMSE の成績に高い相関が認められたことから 8) 現在は毎月 1 回各地区持ち回りで高齢者健康教室を開催し、健康に関する講演が行われ参加者全員に KANA を、希望者に MMSE を施行している。毎年 65 歳以上の地区住民の約 7 割に KANA が施行され、その得点が 60 歳代で 10 点以下、70 歳代で 9 点以下、80 歳代で 8 点以下の要注意者は 2 次スクリーニングとして保健師が家庭訪問を行い MMSE が施行されている。その中で MMSE 得点が 20 点以下の場合にかかりつけ医または協力医療機関に紹介するとともに、継続訪問を行い健康状態や生活状況の把握、家族への助言、介護者の健康管理などが行われている。本研究ではこれまで蓄積された KANA および MMSE のデータから繰り返し施行によるテスト成績の経時的変動について検討した。

#### <対象および方法>

K 町在住の 65 歳以上の在宅高齢者を対象に脳検診の希望を募った。平成 6 年の脳検診の参加者は述べ 506 名 (男性 159 名、女性 347 名、平均年齢 74.1 歳) であった。そのうち MMSE と KANA を施行された 314 名を解析の対象とした。

かなひろいテスト (KANA) : KANA はすべてひらがなで書かれた昔話の内容を理解しながら読み進めて行くと同時に文中に出てくる「あいうえお」の文字に制限時間 2 分間でマークしていくもので、全部正解すると 56 点になる。

KANA の成績と MMSE の成績の経時変化 : KANA の成績と MMSE の成績の変動を縦断的に検討するために、KANA 及び MMSE を 8 年間に 4 回以上施行された参加者を対象とした。すなわち、同一人物について、初年度、1-2 年後、3-4 年後、5-8 年後の時点の KANA 及び MMSE の成績について、反復測定分散分析を行い、成績の変動を調べた。また 8 年間に 2 回以上 KANA および MMSE をうけた 334 名を対象とし、初年度、1-2 年後、3-4 年後、5-8 年後の KANA 及び MMSE の成績の変動を一元配置分散分析で調べた。

KANA と MMSE の関連 : 初回測定 of KANA の成績と MMSE の成績に有意な相関があることは先行研究で明らかにしているが 7)、今回は両テスト成績の相関の経時変を Pearson の相関係数を用いて検討した。P<0.05 を有意とした。

尚、病床にあるもの、認知症の診断を受けているものは除外した。本研究は佐賀大学医学部倫理委員会の承認を得ている。

#### <結果>

これまで KANA は毎年 1 回施行されてきたが、最近 8 年間にテストをうけた被験者は 474 名 (男性 159 名、女性 347 名 ; 平均年齢 73.9±6.2 歳) であり、そのうち 313 名が MMSE

も同時に施行された。測定初年度の KANA の得点は  $15.8 \pm 9.7$ 、MMSE の得点は  $24.9 \pm 3.8$  であった。年齢と初回の KANA 及び MMSE の成績の間には有意な相関があった (KANA  $r = -0.422$ ,  $P < 0.0001$ , MMSE  $r = -0.387$ ,  $P < 0.0001$ ,  $n = 314$ )。最近 8 年間に KANA を 4 回以上受けた被験者は 73 名であった。個人の KANA の成績の経時変化を Table 1 に示す。KANA は初回に比べて、3 回目と 4 回目の時点で有意な点数の上昇が認められた ( $F(3,74) = 23.9$ ,  $P < 0.0001$ )。この成績の改善に男女差は認められなかった。一方 MMSE を 8 年間で 4 回以上受けたものは 8 名であり 4 回の中に有意な変動は認められなかった ( $F(3,7) = 1.28$ ,  $P = 0.30$ )。そこで 8 年間に 2 回ないし 3 回 MMSE を施行した参加者を含め、延べの成績でみると初回が  $24.9 \pm 3.8$  点 ( $N = 314$ )、2-3 年後の 2 回目が  $24.9 \pm 4.1$  ( $N = 113$ )、4-5 年後の 3 回目が  $23.8 \pm 4.1$  点 ( $N = 49$ )、6-8 年後の 4 回目が  $23.6 \pm 4.1$  点 ( $N = 34$ ) であり、この 4 群間には有意差は認めなかった。また初年度と 2 回目の同一個人 の KANA 及び MMSE の成績には有意な正の相関が認められた (初回  $r = 0.44$ ,  $P < 0.0001$ ,  $n = 314$ ; 2 回目  $r = 0.38$ ,  $P < 0.0001$ ) が 3 回目と 4 回目の KANA と MMSE には相関は認めなかった (3 回目  $r = 0.11$ ,  $P = 0.46$ ,  $n = 46$ ; 4 回目  $r = 0.45$ ,  $P = 0.23$ ,  $n = 10$ )。

Table 1, 同一個人 の KANA および MMSE 成績の経時変化

	初年度	2~3 年後	4~5 年後	6~8 年後	
KANA (n=75)	$15.8 \pm 9.7$	$14.03 \pm 6.7$	$17.9 \pm 9.1^*$	$22.9 \pm 10.5^{**}$	$F(3,74) = 23.9$ $P < 0.0001$
MMSE (n=8)	$22.4 \pm 3.0$	$22.1 \pm 3.8$	$20.75 \pm 3.7$	$20.5 \pm 4.6$	$F(3,7) = 1.28$ , $P = 0.30$

Table 2, KANA 及び MMSE 成績の経時変化と両者の相関 (2 回以上施行)

	初年度	2~3 年後	4~5 年後	6~8 年後	
KANA	$14.1 \pm 9.6$	$15.1 \pm 9.3^*$	$18.6 \pm 10.4^{**}$	$22.1 \pm 10.7^{**}$	$F(3,1122) = 23.2$ $P < 0.0001$
N	475	352	222	77	
MMSE	$25.0 \pm 3.8$	$25.1 \pm 4.1$	$23.6 \pm 4.1$	$23.6 \pm 4.1$	$F(3,513) = 3.03$ $P = 0.029$
N	333	113	49	34	
相関 r (n)	0.44 (314)	0.38 (108)	0.11 (46)	0.44 (10)	
	$P < 0.0001$	$P < 0.0001$	$P = 0.46$	$P = 0.23$	

### <考察>

今回の初回の KANA の得点は金子らの報告とほぼ同じでありテストの施行方法に問題はないと思われた。しかし、今回の個人成績の経時変化を調べると3回目、4回目では有意な得点の増加が認められた。一方 MMSE の成績は減少傾向が認められた。KANA 成績の増加は実際に認知機能が改善したというより、KANA を繰り返し施行することによる学習効果だと考えられる。これは同時に行った MMSE の点数との相関が2回目までは認められるものの、3回目、4回目での相関がなくなることで矛盾しない。これらの結果は KANA が個人の知的機能の経時変化を正しく反映しないことを示唆している。おそらく、3回目の施行から文の内容を追わずに文字列から「あいうえお」だけをピックアップする方略をとるようになった結果だと考えられる。今後、テストの後に問題文の内容を理解しているかどうかを問う質問を追加して得点の補正を行うなどの工夫が必要である。しかし、今回の結果は必ずしも KANA の有用性を否定するものではない。初回の KANA 成績は MMSE 得点と相関が認められたことは、少なくとも初回の施行であればその利便性からスクリーニングテストとしての有用性は明らかである。これまで同じ母集団について野口らは KANA の成績と UCLA 孤独感尺度得点と有意な負の相関を見出している 9)。また原岡は先行研究のなかで、5年間で KANA の得点が上昇した群は下降した群に比べて、生き甲斐満足度が有意に高いことを報告している 1)。

MMSE は世界的に共通して行われている知的機能検査で信頼性も高い。Jacqmin-Gadda H らは 2537 名の健常高齢者に対して MMSE の 5 年間の経時変化を調べ、初回テストでは緊張により低得点となり、2 回目では慣れや学習効果により得点は増加し、2 年から 5 年目にかけて若干低下する (65 歳に開始した場合 0.02 点、85 歳に開始した場合 0.57 点低下) ことを報告している 3)。また別の研究では 75 歳以上の一般高齢者 924 名の MMSE 得点の低下は年間平均 0.4 点と報告されており、加齢、女性、教育程度、脳血管障害、収縮期血圧の低下等の様々な因子が関与している 11)。今回の MMSE の結果では得点の低下は認められたもののその幅は 6-8 年間で 1.325 点の減少に留まり Zhu らの報告に比べ少なかった。これは MMSE を希望者のみに施行したことから、特に成績の低下傾向にある参加者ほど検査を忌避する傾向が多く、8 年間で 4 回以上 MMSE が施行されたのは 8 名と少数になったことが影響していると思われる。すなわち今回認められた MMSE の経時変化には参加者のバイアスがかかり、MMSE 得点の低下は Zhu らの報告より少なくなったと思われる。このように MMSE の施行に際し多数の脱落者が出たことは MMSE 検査が精神的苦痛や緊張を伴うことを示唆している。

知的機能の経時変化を追跡するための効果的な認知症のスクリーニング法には被験者の負担が少なく複数の対象者に同時に施行できる簡便なテストバッテリーが求められている 7)。

本論分の要旨は第 57 回九州精神神経学会（2004 年 11 月佐賀）において発表した。尚研究費の一部は平成 16 年度長寿科学総合研究—伊万里市黒川町における老化に関する長期縦断疫学研究—によった。

#### 文献

- 1) 原岡一馬 平成 16 年度長寿科学総合研究 分担研究報告書
- 2) 飯島 睦、大澤美貴雄、岩田誠、パーキンソン病の前頭葉機能と事象関連電位、臨床脳波、37:180-184, 1996.
- 3) Jacqumin-Gadda H, Fabrigoule C, Commenges D, Dartigues JF A 5-year longitudinal study of the Mini-Mental State Examination in normal aging. Am J Epidemiol. 145:498-506, 1997.
- 4) 金子満雄 痴呆と前頭葉機能、失語症研究、10 : 27-31, 1990.
- 5) 金子満雄 かなひろいテスト、老年期痴呆、10 : 79-82, 1996.
- 6) 金子満雄 脳リハビリのための早期痴呆のスクリーニング、浜松二段階方式のマニュアル、地域保健、29 : 35-56, 1998.
- 7) Kilada S, Gamaldo A, Grant EA, Moghekar A, Morris JC, O'Brien RJ Brief screening tests for the diagnosis of dementia: comparison with the mini-mental state exam. Alzheimer Dis Assoc Disord. 19:8-16. 2005.
- 8) 古賀照邦、小島秀樹、山田茂人 佐賀県伊万里市における老年期痴呆の疫学的研究、医学のあゆみ、187 : 748-749, 1998.
- 9) 野口房子、中島洋子、森本由美子 在宅老人の孤独感と痴呆の関連、久留米医学会雑誌、61 : 123-131, 1998.
- 10) 大浦栄次 簡易脳機能テスト「かなひろいテスト」富山県農村医学研究会誌、32 : 30-51, 2002.
- 11) Zhu L, Viitanen M, Guo Z, Winblad B, Fratiglioni L Blood pressure reduction, cardiovascular diseases, and cognitive decline in the mini-mental state examination in a

community population of normal very old people: a three-year follow-up. J Clin Epidemiol. 51:385-391, 1998.

12) 山上徹也、田井中はるみ、松田祐一、山口晴保、Kohs 立方体組み合わせテストは mild cognitive impairment のスクリーニングにつかえるか MMS-かなひろいテストとの比較検討、老年精神医学雑誌、12, 671-678, 2001.

A 8 years longitudinal study of Kana-pick out test in non-demented elderly subjects

Itaru Watanabe, M.D.<sup>1)</sup>, Naoki Kojima, M.D.<sup>2)</sup>, Tomoko Iwatani<sup>2)</sup>, Toshiroh Kawashima, M.D.<sup>1)</sup>, Yutaka Kunitake, M.D.<sup>1)</sup>, Kazuhiro Sugataka, M.D.<sup>1)</sup>, Kazuma Haraoka, PhD.<sup>3)</sup>, Tetsuya Tateishi, M.D.<sup>1)</sup>, Shigeto Yamada, M.D.<sup>1)</sup>

<sup>1)</sup>Department of Psychiatry, Faculty of Medicine, Saga University, 849-8501, Saga 5-1-1, Saga city

<sup>2)</sup>Aikeikai Social Welfare Corporation

<sup>3)</sup> Department of psychology, Faculty of Literature, Kurume University.

Key Words: Kana-pick out test, MMSE, cohort study, dementia

The aim of this study is to compare the course of the performance of two psychometric tests during a eight-year period in a cohort of non-demented elderly subjects. We studied Kana-pick out test (KANA) which pick out vowel letters in a fable written by Japanese within 2 minuets and the Mini-Mental State Examination (MMSE) 4 times at baseline(T0), 2 to 3 years(T2), 4 to 5 years(T3) and 6 to 8 years(T4). One Way Analysis of variance with repeated measure showed the improvement of the performance of KANA at T3 and T4. The improvement of the KANA performance at T3 and T4 may be explained by a practice effect induced by repetition of the test. On the other hand, the MMSE performance showed gradually decline with time passes. There was a significant correlation between the score of MMSE and that of KANA at T0 ( $r=0.44$ ,  $P<0.0001$ ,  $n=313$ ). However, the significance of the correlation was disappeared at T3 and T4. Theses data indicate that KANA used at a first time was a useful screening tool for dementia from general population. However, KANA was inappropriate for observing longitudinal change of cognitive function in a cohort study, because of the improvement of the KANA performance with repetitive use of KANA.

# Mental Health among Students in Information-oriented Society:

## Prevalence and psychological status in relation to Internet addiction

Takeshi Sato \*<sup>1</sup> Kumiko Nakashima \*<sup>2</sup>  
Keiko Kidoh \*<sup>1</sup> Shigeto Yamada \*<sup>3</sup>

【要約】 To understand the current prevalence and psychological status of Internet addiction among college students, we evaluated them using the Internet Addiction Test (IAT), the STAI-state, the STAI-trait, the SDS, and the BDI. The first study was performed in a sample of 93 freshmen (78 males and 15 females) of the department of Science and Engineering at Saga University. The second study was performed in a sample of 118 students (42 males and 76 females) of the department of Culture and Education or Agriculture at Saga University. The prevalence rates of Internet addiction among students at the Science and Engineering, and Culture and Education or Agriculture were 7.5%, 17.0%, respectively. Based on our result from four psychological test performed in the second study, a significantly higher score was observed in the Internet addiction group based on the STAI-state, the STAI-trait and the SDS, but no significant difference was found in the BDI score.

According to these results, we emphasized that Internet addiction might be associated with anxiety and depression as it may reflect stressful situations experienced by the subjects. We also introduced psychological problems concerned with mobile phone e-mail addiction encountered in a primary care practice.

### INTRODUCTION

The explosive growth of the Internet in the last decade has had a huge impact on communication and interpersonal behavior. Psychological research during the

same period has sought to increase understanding of this impact. The Internet was originally designed to facilitate communication and research activities. However, the dramatic increase in the use of the Internet in recent years has led to pathological use (Internet addiction). The effect of Internet addiction includes the impairment of academic performance, psychological well-being, and interaction with peers and family members.

To understand the current status of Internet addiction among college students, this study aims to clarify the prevalence of Internet addiction among students and compares with that in foreign countries. Next, we will evaluate the psychological problems with Internet addiction using several psychological instruments. Third,

キーワード : Internet addiction, Prevalence, Anxiety, Depression, College student, Mental health

\*<sup>1</sup> Health Care Center, Saga University, 1 Honjo-machi, Saga 840-8502, Japan

\*<sup>2</sup> A Master of Postgraduate Course, Faculty of Medicine, Saga University

\*<sup>3</sup> Department of Psychiatry, Faculty of Medicine, Saga University



it also introduces psychological problems concerned with Internet addiction and mobile phone e-mail encountered in a primary care practice.

## SUBJECTS AND METHODS

### Subjects

The first study consisted of the 93 first-year students in 2005 of the Saga University who were Science and Engineering students (average age  $18.3 \pm 0.7$  years, 78 men and 15 women). On the other hand, the second study consisted of the 118 first-year students in 2005 of the Saga University who were Culture and Education, or Agriculture students (average age  $18.6 \pm 1.3$  years, 42 men and 76 women). They had attended our lecture of Health Science.

All students provided their fully informed consent to the aims of this research.

### Methods

First, we examined that the rate of Internet addiction at the department of Science and Engineering, or culture and education or its of agriculture. Second, we investigated whether there was the relationship between Internet addiction, anxiety and depression.

We selected four types of questionnaire for this study and described below.

*Internet Addiction Test (IAT)*: The Internet Addiction Test (IAT) developed by Young<sup>1)</sup> appears in his book, *Caught in the Net*. This is a simple exercise that helps people in two ways: (1) If patients already know or strongly believe they are addicted to the Internet, this guide will assist them in identifying the areas in their life most impacted by their excessive Net use; and (2) If they are not sure whether they are addicted or not, this will help determine the answer and begin to assess the damage done. When answering, respondents should only consider the time they spent on-line for non-academic or non-job related purposes. The IAT has been already translated into Japanese and can be used by clinicians for screening in their clinic if they want to rule out Internet addiction (Appendix). After patients have

answered all the questions, a final score can be obtained by the numbers they selected. The higher their score, the greater their level of addiction and the greater the number of problems their Internet usage causes. Here's a general scale to help measure their score:

20-49 points: You are an average on-line user. You may surf the Web a bit too long at times, but you have control over your usage.

50-79 points: You are experiencing occasional or frequent problems because of the Internet. You should consider its full impact on your life.

80-100 points: Your Internet usage is causing significant problems in your life. You should evaluate the impact of the Internet on your life and address the problems directly caused by your Internet usage.

*State-Trait Anxiety Inventory (STAI)*: The STAI<sup>2)</sup> is a measure of trait and state anxiety. The validity of the Japanese version of the STAI was developed and its reliability was highly estimated. It includes two scales: the state form and the trait form. Each scales consists of 20 items that indicate the absent or not of the anxiety symptoms.

*Zung Self-rating Depression Scale (SDS)*: The SDS<sup>3)</sup> is a self-report test that was designed as a short simple way of quantifying the severity of depression among patients. Items that were developed to reflect common clinical symptoms among the depressed are balanced: half are positively worded and half are negatively worded. The primary use of the SDS has been in clinical research to monitor treatment effectiveness, but it has also been used in general medical practice as a screening test. The severity of depression was assessed using it for depression ranging 20-80. More than 48 in this SDS indicates a depressive state, 42-47 a borderline state, and 41 or less a normal state.

*Beck Depression Inventory (BDI)*: The BDI<sup>4)</sup> is a 22-item questionnaire that emphasizes cognitive rather than somatic symptoms of depression over the past 2 weeks. It is reliable and correlates well with other measures of depression, but may in part assess a general distress or neuroticism factor.

**Table 1. Internet addiction and psychological tests**

	Control group	Internet addiction group	t value	p value
	(N = 73)	(N = 15)		
	mean (SD)	mean (SD)		
STAI-state	42.7 (9.6)	50.8 (16.4)	- 2.101	0.0396
STAI-trait	48.5 (8.9)	59.0 (14.8)	- 2.986	0.0040
SDS	41.4 (6.2)	50.7 (8.7)	- 3.335	0.0015
BDI	7.2 (6.7)	10.8 (7.5)	- 1.786	0.0778

### Data analysis

In statistical analysis, the two-tailed  $\chi^2$  test, Fisher's Exact test, and two-tailed Student's t test were used. Tests were at the 0.05 level of significance.

## RESULTS

### The first study

In the assessment of the Science and Engineering students, it was found that the mean IAT score ( $\pm$  standard deviation [SD]) was  $26.5 \pm 8.6$ . In this study, we classified them into two group according the total score of the IAT: Internet addiction group (IAT is 40 or more) and control group (IAT is less than 40). Of the 93 students eligible for the study, 7 students (7.5%) were diagnosed as Internet addiction according to this classification. On the other hand, the rate found at the same department performed in 2004 was 5.0% (5 among 100 students). There was not found significant increase in the rate of Internet addiction between the two year ( $\chi^2 = 0.528$ ,  $p = 0.5575$ , using Fisher's exact test).

### The second study

The mean IAT score among Culture and Education, or Agriculture students was  $31.0 \pm 12.9$ . The rate of Internet addiction was 17.0% (15 among 88 students). There was significant difference between Science and Engineering students and Culture and Education, or Agriculture students ( $\chi^2 = 4.571$ ,  $p = 0.0325$ ).

According to the psychological tests, the score of STAI-state (men/women), STAI-trait(men/women), SDS, and BDI were  $45.2 \pm 8.4/42.3 \pm 10.7$ ,  $49.3 \pm 8.0/49.7 \pm 10.8$ ,  $42.1 \pm 7.0$ ,  $7.7 \pm 6.4$ , respectively.

With regard to the comparison between the IAT group and control group on the psychological tests, the results were shown in **Table 1**. There were significant differences between the two groups on the following tests: STAI-state,  $t = - 2.101$ ,  $p = 0.0396$ ; STAI-trait,  $t = - 2.986$ ,  $p = 0.0040$ ; SDS,  $t = - 3.335$ ,  $p = 0.0015$ ). Significant difference on the BDI was not observed ( $t = - 1.786$ ,  $p = 0.0778$ ).

Overall, college students with Internet addiction or with the tendency of Internet addiction had high level of state and/or trait anxiety. In addition, they also had depressive symptoms from the perspective of the SDS.

## DISCUSSION

Addictive use of the Internet is a new phenomenon that many practitioners are unaware of and consequently unprepared to treat. Some practitioners are unfamiliar with the Internet, making its seductive powers difficult to understand. Sometimes its impact on the afflicted person's life is underestimated as many practitioners do not recognize the legitimacy of the disorder. Hence, this paper starts with a review of the diagnostic criteria of Internet addiction to help prepare clinicians for this issue.

### Definition of Internet addiction

The best method clinically to detect compulsive use of the internet is to compare it with criteria for other established addictions. Of all the diagnoses referenced in the Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders (DSM-IV)<sup>5)</sup> pathological gambling was viewed

**Table 2. Diagnostic criteria for Internet addiction according to DSM-IV<sup>1)</sup>**

1. Do you feel preoccupied with the internet (think about previous online activity or anticipate the next online session)?
2. Do you feel the need to use the internet with increasing amounts of time in order to achieve satisfaction?
3. Have you repeatedly made unsuccessful efforts to control, cut back, or stop internet use?
4. Do you feel restless, moody, depressed, or irritable when attempting to cut down or stop internet use?
5. Do you stay online longer than originally intended?
6. Have you jeopardized or risked the loss of a significant relationship, job, educational or career opportunity because of the internet?
7. Have you lied to family members, therapist, or others to conceal the extent of your involvement with the internet?
8. Do you use the internet as a way of escaping from problems or of relieving a dysphoric mood (for example, feelings of helplessness, guilt, anxiety, depression)?

as most akin to this phenomenon. Prior research defined internet addiction as an impulse control disorder that does not entail an intoxicant.

Using pathological gambling as a model, Young<sup>2</sup> developed eight items of criteria of Internet dependency that modified the DSM-IV criteria to be used as a screening device to differentiate "dependent" from "non-dependent" users. The questions are shown in **Table 2**.

Patients are considered "addicted" when answering "yes" to five or more of the questions and when their behavior cannot be better accounted for by a manic episode. The cut off score of "five" is consistent with the number of criteria used for pathological gambling and seen as an adequate number of criteria to differentiate normal from pathological Internet use. Official criteria for the diagnosis of Internet Addiction Disorder (IAD) along with more information on IAD and subscription information for the Internet Addiction Support Group (IASG) on Ivan Goldberg's website<sup>6)</sup>.

### Screening devices for Internet addiction

How do patients know if they are already addicted or rapidly tumbling toward trouble? Everyone's situation is different, and it's not simply a matter of time spent on-line. Some patients feel they are addicted with only twenty hours of Internet use, while others who spent forty hours on-line insist it is not a problem to them. It's more important to measure the damage their Internet use causes in their life. What conflicts have emerged in family, relationships, work, or school?

In this study we used the Internet Addiction Test

(IAT) developed by Young for screening. Another scale includes Pathological Internet Use Scale (PIUS) developed by Morahan-Martin and Schumacher<sup>7)</sup>.

### Prevalence of Internet addiction

The prevalence of Internet addiction is shown in **Table 3**. These studies were undertaken using varying instruments, and show that 8-10% of college students have Internet dependence<sup>7-17)</sup>. These results were obtained from many college student population studies and are similar to results in this study. However, the prevalence of Internet addiction among college students differed from the department. To compare our data with that in Korea, prevalence rate in Korea is about four times as high as our result in Japan. Further studies are necessary to clarify the factors associated with the prevalence rate of Internet addiction. In addition, primary care physicians may also need data based on community samples.

It is difficult to predict the future prospects of Internet dependence. It might be on the increase, or it may fade out. Before drawing any conclusions about this study, it is necessary to perform a prevalence study of Internet addiction on a large scale in Japan.

### Characteristics of Internet addiction

With regard to gender and addiction, Greenberg et al.<sup>18)</sup> reported an interesting pattern of gender differences in addictive tendencies (**Table 4**). Analyses on the individual substances and activities revealed that men reported greater level of addiction to cigarettes,

**Table 3. Prevalence of Internet addiction among students**

Year	Authors	Country	Subjects	Number of Subjects	Percentage of Internet Addiction	Assessment tool
1997	Scherer <sup>8)</sup>	South America	college	531	13.0	Internet dependence
2000	Chou & Hsiao <sup>9)</sup>	Taiwan	college	910	5.9	IAT
2000	Morahan-Martin & Schumacher <sup>7)</sup>	US	college	283	8.1	PIU scale
2001	Anderson <sup>10)</sup>	US	college	1,300	9.8	Internet dependence
2001	Wang <sup>11)</sup>	Australia	college	293	9.6	IAD
2002	Mingyi <sup>12)</sup>	China	college	500	6.4	IAD
2002	Lin & Tsai <sup>13)</sup>	Taiwan	high school	753	11.7	Chinese IAS
2004	" Johansson & Gotestam <sup>14)</sup>	Norway	12-18 years	3,237	10.7	IAT 40 or more
2004	Sato <sup>15)</sup>	Japan	college	242	9.1	IAT 40 or more
2005	Niemz et al <sup>16)</sup>	UK	college	371	18.3	PIU scale
2006	Kim et al <sup>17)</sup>	Korea	high school	1,573	39.6	IAT 40 or more

(IAT : Internet Addiction Test, PIU : Pathological Internet Use, IAD : Internet Addiction Disorder)

**Table 4. Gender Difference in Addiction<sup>18)</sup>**

Addiction	Gender difference	Addiction	Gender difference
Substances		Activities	
Alcohol	M > W	Exercise	M = W
Cigarettes	M > W	Television	M = W
Caffeine	M < W	Internet use	M > W
Chocolate	M < W	Video games	M > W
		Gambling	M > W

alcohol, video games, gambling, and internet use. On the other hand, women reported greater levels of addiction to chocolate and caffeine. No significant differences were found for exercise or television. Men tend to be addicted to the Internet.

Furthermore, low self-esteem has been linked to addictive behaviors. Armstrong et al. investigated whether low self-esteem was associated with Internet addiction, and found that self-esteem was a good predictor of Internet addiction and amount of time spent online per week. According to Kim et al.<sup>17)</sup> the level of depression and suicidal ideation were highest in the Internet-addicts group. Our study indicates that Internet addiction group had significantly high level of anxiety and depression. It might reflect their interpersonal relationship or stressful situation among college students in

Japan. Further studies should investigate the direct relationship between psychological health problems and Internet dependence.

#### Future problems of Internet addiction in primary care practice in Japan

Recently, the use of e-mail on mobile phones among adolescents in Japan has been increasing. New and serious psychological problems have arisen relative to the spread of mobile phones (keitai). Some Japanese adolescents with school refusal use the mobile phone e-mail to communicate with their friends excessively. I encountered two cases of high school students with school refusal in a primary care practice. They sent e-mail to their friends more than 200 times a day. They could not stop using mobile phone e-mail, and then were

## Appendix

### Internet Addiction Test (IAT) <sup>1)</sup>

To assess level of addiction, answer the following questions using this scale: 1 = Rarely, 2 = Occasionally, 3 = Frequently, 4 = Often, 5 = Always.

1. How often do you find that you stay on-line longer than you intended?
2. How often do you neglect household chores to spend more time on-line?
3. How often do you prefer the excitement of the Internet to intimacy with your partner?
4. How often do you form new relationships with fellow on-line users?
5. How often do others in your life complain to you about the amount of time you spend on-line?
6. How often do your grades or school work suffer because of the amount of time you spend on-line?
7. How often do you check your e-mail before something else that you need to do?
8. How often does your job performance or productivity suffer because of the Internet?
9. How often do you become defensive or secretive when anyone asks you what you do on-line?
10. How often do you block out disturbing thoughts about your life with soothing thoughts of the Internet?
11. How often do you find yourself anticipating when you will go on-line again?
12. How often do you fear that life without the Internet would be boring, empty, and joyless?
13. How often do you snap, yell, or act annoyed if someone bothers you while you are on-line?
14. How often do you lose sleep due to late-night log-ins?
15. How often do you feel preoccupied with the Internet when off-line, or fantasize about being on-line?
16. How often do you find yourself saying "just a few more minutes" when on-line?
17. How often do you try to cut down the amount of time you spend on-line and fail?
18. How often do you try to hide how long you've been on-line?
19. How often do you choose to spend more time on-line over going out with others?
20. How often do you feel depressed, moody, or nervous when you are off-line, which goes away once you are back on-line?

exhausted from sending mail all day, which resulted in depression. Kamibeppu and Sugiura <sup>19)</sup> found that they used it much more frequently for e-mail than as a phone. Most of them exchanged e-mails between schoolmates, and more than a half of them exchanged e-mails more than 10 times a day. Sociable students estimated that their own keitai was useful for their friendship. But they experienced some insecurity or started staying up late at night engaged in e-mail exchanges, and they thought that they could not live without their own keitai. They had developed addictive and compulsive behavior to e-mail use on mobile phones, which impaired academic performance, psychological well-being, and interpersonal relationships with friends and family members.

As shown in case vignettes of these two high school students, new psychological problems have developed as a result of the change of communication media in Japan. We should pay more attention to adolescents' feelings and then propose possible solutions for problematic behavior among adolescents and students.

### References

- 1) Young KS : Caught in the Net: How to recognize the sign of Internet addiction and a winning strategy for recovery. John Wiley & Sons, New York, 1996 (Odashima Y: Mainichi Publishing Co., Tokyo, 1998; translated in Japanese)
- 2) Spielberger CD, Gorsuch RL, Lushene RE : STAI Manual for the State-Trait Anxiety Inventory. Consulting Psychologists Press, Calif., 1970
- 3) Zung WK : A self-rating depression scale. Arch Gen Psychiatry 12 : 63-70, 1965
- 4) Beck AT, Ward CH, Mendelson M, et al : An inventory for measuring depression. Arch Gen Psychiatry 4 : 561-571, 1961
- 5) American Psychiatric Association (APA) : Diagnostic and statistical manual of the mental disorders (4th ed.). American Psychiatric Publishing, Inc., Washington DC, 1994
- 6) Goldberg I : Internet Addictive Disorder (IAD) Diagnostic Criteria. Available on line at <http://www.psycom.net/iadcriteria.html>

- 7) Morahan-Martin J, Schumacher P: Incidences and correlates of pathological Internet use among college students. *Computers in Human Behavior* 16:13-29, 2000
- 8) Schere K: College life on-line: healthy and unhealthy Internet use. *J of College Student Development* 38 : 655-665, 1997
- 9) Chou C, Hsiao MC : Internet addiction, usage, gratification, and pleasure experience: The Taiwan college students' case. *Computers and Education* 35 : 65-80, 2000
- 10) Anderson KJ : Internet use among college students: an exploratory study. *J Am Coll Health* 50 : 21-26, 2001
- 11) Wang W : Internet dependency and psychosocial maturity among college students. *Int J Hum Comp* 55 : 919-938, 2001
- 12) Mingyi Q : Internet abuse raises concern. Available on line at <http://www.china.org.cn/english/25467.htm>
- 13) Lin SSJ, Tsai CC : Sensation seeking and Internet dependence of Taiwanese high school adolescents. *Comput Hum Bahav* 18 : 411-426, 2002
- 14) Johansson A, Gotestam K : Internet addiction: Characteristics of a questionnaire and prevalence in Norwegian youth (12-18 years). *Scand J Psychol* 45:223-229, 2004
- 15) Sato T: Psychiatric consultation in the internet addiction. *Jpn J Psychiat* 9 : 345-351, 2004 (in Japanese)
- 16) Niemz K, Griffiths M, Banyard P : Prevalence of pathological internet use among university students and correlations with self-esteem, the General Health Questionnaire (GHQ), and Disinhibition. *Cyberpsychol Bahav* 8 : 562-570, 2005
- 17) Kim K, Ryu E, Chon MY, et al : Internet addiction in Korean adolescents and its relation to depression and suicidal ideation: A questionnaire survey. *Int J Nurs Stud* 43 : 185-192, 2006
- 18) Greenberg JL, Lewis SE, Dodd DK : Overlapping addictions and self-esteem among college men and women. *Addict Behav* 24 : 565-571, 1999
- 19) Kamibeppu K, Sugiura H: Impact of the mobile phone on junior high-school students' friendships in the Tokyo metropolitan area. *CyberPsychol & Behav* 8 : 121-130, 2005

---

受理日 : 2006 年 4 月 5 日

Abstract

情報化社会における学生のメンタルヘルス  
—インターネット中毒の有病率と心理的状态—

佐藤 武\*<sup>1</sup> 中島久美子\*<sup>2</sup> 木道 圭子\*<sup>1</sup> 山田 茂人\*<sup>3</sup>

\*<sup>1</sup> 佐賀大学保健管理センター (〒840-8502 佐賀市本庄町1)

\*<sup>2</sup> 佐賀大学医学系研究科修士課程

\*<sup>3</sup> 佐賀大学医学部精神医学教室

大学生におけるインターネット中毒の有病率と心理状態を理解するために、インターネット中毒度テスト Internet Addiction Test (IAT, Young, 1998), STAI 状態不安尺度および特性不安尺度, SDS うつ性自己評価尺度, BDI ベック抑うつ質問票を用いて評価した。第1の研究では佐賀大学新入生 (理工学部) 93名 (男性78名, 女性15名) を対象に, 第2の研究では佐賀大学新入生 (文化教育学部+農学部) 118名 (男性42名, 女性76名) を対象に調査を行った。その結果, インターネット中毒群を IAT スコアが40以上と定義した場合, 第1および第2の対象のインターネット中毒の有病率は, それぞれ7.5%と17.0%であった。次に, 第2の研究対象をインターネット中毒群 (IAT  $\geq$  40) およびコントロール群 (IAT < 40) の2群に分け, 4つの心理検査の結果を比較検討した。その結果, インターネット中毒群では有意に STAI-state, STAI-trait, SDS が高く, BDI では有意差はみられなかった。

以上の結果から, インターネット中毒は不安や抑うつと関連があり, それは学生がかなりストレスフルな状況を感じている可能性が示唆された。また, 最近のプライマリケアの診療場面でみられた不登校児における携帯電話電子メール中毒の問題も紹介した。

**Key words:** インターネット中毒, 有病率, 不安, 抑うつ, 大学生, メンタルヘルス

[Original Article]

## Determination of Paroxetine in Human Saliva by Reversed-Phase High-Performance Liquid Chromatography with UV Detection

Toshinori TSURUTA\*<sup>1</sup>, Chunyan YANG\*<sup>2</sup>, Hiroshi UEKI\*<sup>2</sup>, Guangying LI\*<sup>2</sup>,  
Akiko MAEKAWA\*<sup>3</sup>, Hideki KAMIKAWA\*<sup>2</sup>, Eisaku OKU\*<sup>2</sup>, Takao SOMEHARA\*<sup>4</sup>,  
Hiroshi FUJITO\*<sup>1</sup>, Hideharu TATEBAYASHI\*<sup>2</sup> and Shigeto YAMADA\*<sup>2</sup>

\*<sup>1</sup> Division of Pharmacy, Saga University Medical Hospital

\*<sup>2</sup> Departments of Psychiatry and \*<sup>3</sup> Nursing, Saga University School of Medicine  
5-1-1, Nabeshima, Saga, 849-8501 Japan

\*<sup>4</sup> Division of Pharmacy, Fukuoka Saiseikai Hospital

(Accepted September 28, 2006)

**Abstract:** A rapid and sensitive high-performance liquid chromatographic method was validated and described for determination of paroxetine in human saliva. Following liquid-liquid extraction of the drug and an internal standard (dibucaine), chromatographic separation was accomplished using a C18 analytical column with a mobile phase consisting of 0.05 mol/L sodium phosphate buffer, pH 5.0, and acetonitrile (A 30:70, v/v; B 60:40, v/v). Paroxetine and the internal standard were detected by ultraviolet absorbance at 205 nm. The average recoveries of the drug and internal standard were 92.5% and 89%, respectively. The lower limits of detection and quantification were 1 and 4 ng/ml, respectively, and the calibration curve was linear over a concentration range of 4 ng/ml. The saliva level of paroxetine in patients with depression taking 10 to 40 mg/day of the drug was significantly correlated with the plasma level of paroxetine in each patient ( $r=0.617$ ,  $P<0.004$ ,  $n=19$ ). These data indicate that the saliva level of paroxetine could be a useful marker to predict the plasma level of the drug.

**Key words:** Paroxetine, Saliva, High-performance liquid chromatography, Fluorescence detection

Paroxetine, (3S-trans)-3((1,3-Benzodioxol-5-yloxy)methyl)-4-(4-fluorophenyl)-piperidine hydrochloride, is a member of class of serotonin selective reuptake inhibitors (SSRI), which are usually used as antidepressants for patients with depression. As paroxetine is metabolized by Cytochrome P450 (CYP) 2D6 and also simultaneously inhibits the CYP2D6 activity, it is easy for the plasma paroxetine to attain a toxic level, resulting in serious adverse effects in patients with depression.

When paroxetine was given with decipramine or imipramine, these concentrations were apt to rise. When the dose of paroxetine rose, its concentration in plasma was liable to rise disproportionately. For example, a patient given 20 mg/day of paroxetine was detected to have 3.3 times the concentration of a patient given 10 mg/day as the maximum concentration in plasma. A patient given 40 mg/day of paroxetine was detected to have 14 times the concentration of a patient given 10 mg/day as the maximum concentration in plasma. Thus it is necessary to monitor the plasma level of paroxetine to prevent a toxic level of the drug. Moreover, the monitoring of

the drug concentration should be a useful tool to check the drug compliance of the patients. There are several reports to determine the plasma level of paroxetine (Härter et al, 1994). In the present study, we intended to measure paroxetine concentration in human saliva from patients is a noninvasive way.

### MATERIALS AND METHODS

#### 1. Paroxetine and reagents

Paroxetine was kindly donated by Smithkline Beecham Pharmaceuticals (Rio de Janeiro, Brazil). Metanol, HPLC grade, was obtained from J.T. Baker (Phillipsburg, USA). Omnisolv acetonitrile, hexane and isoamyl alcohol were HPLC grade and purchased from Merck (Darmstadt, Germany). Water was deionized and filtered with a Milli-Q water processing system. All other chemicals were purchased from Merck.

A stock solution of paroxetine was prepared at the concentration of 0.1 mg/ml in acetonitrile and 0.05 mol/L sodium phosphate buffer, pH 5.0, (50:50, v/v), and stored at  $-20\pm 5^\circ\text{C}$ .

#### 2. Methods

Saliva samples were obtained from depressed patients who were treated with paroxetine (Aropax, Smithkline Beecham, Rio de Janeiro, Brazil) at daily doses of 30 mg. The extract

\*<sup>1</sup> Reprint requests should be sent to T. Tsuruta

鶴田季典：〒849-8501 佐賀市鍋島 5-1-1

佐賀大学医学部精神医学教室

E-mail: tsuruta@cc.saga-u.ac.jp

**Abbreviations** CYP2D6: cytochrome P450 2D6, CV: coefficient of variation, HPLC: high-performance liquid chromatography, min: minute, n: number of samples, PAX: paroxetine, P value: probability less than point 0.05 statistically significant, r: correlation coefficient, SSRI: serotonin selective reuptake inhibitor, UV detection: ultraviolet detection, V: voltage, V.s.: voltage/second



consisted of the addition of 200 mg NaCl, 200  $\mu$ l of 0.1 mol/L NaOH, 5 ml hexane: isoamyl alcohol (99:1, v/v) and 10  $\mu$ l of 0.001% dibucaine as internal standard (Gupta,1994) to 1 ml saliva. After shaking in a mechanical horizontal shaker (220  $\pm$ 10 cycles/min) and after centrifugation at 3,000 rpm for 10 min, 4.4 ml of the organic phase was transferred to conic 10 ml tubes and the organic solvent was evaporated in a centrifugal concentrator (TOMY CC-105) with the addition of 50  $\mu$ l of 1 M HCl. Paroxetine was reconstituted in 50  $\mu$ l of the mobile phase, 0.05 mol/L sodium phosphate buffer, pH 5.0, and acetonitrile (50:50, v/v), and 50  $\mu$ l of hexane by shaking for 1 min in a vortex mixer and 25  $\mu$ l from the aqueous phase was injected into the HPLC system.

### 3. HPLC system

The analysis was performed on an HPLC system consisting of an Eicom Model EPC-300 data processor, an Eicom Model NOD-10 NOx-detector, an Eicom Model column, an Eicom Model Ep-300G liquid chromatograph and an Eicom Model DG-300 degasser. Chromatographic separation was achieved at 30°C on an Eicompak SC-50DS column (3 mm $\Phi$   $\times$  150 mm) with a precolumn.

The mobile phase, 0.05 mol/L sodium phosphate buffer, pH 5.0, and acetonitrile (A 30:70, v/v; B 60:40, v/v), was delivered into the HPLC system at a flow-rate of 0.3 ml/min. The ultraviolet detector was set at 205 nm (Zainaghi et al, 2003; Foglia et al, 1997). The retention time of PAX (paroxetine) was 8.87 min.

### 4. Calibration curve

The calibration curve was prepared by the addition of 25  $\mu$ l of standard paroxetine solutions at concentrations of 0.8, 1.6, 2.4, 3.2 and 4 ng/ $\mu$ l of paroxetine in the mobile phase, 0.05 mol/L sodium phosphate buffer, pH 5.0, and acetonitrile (50:50, v/v), to 1 ml of control saliva aliquots with 100 ng of dibucaine as an internal standard, resulting in saliva paroxetine concentrations of 20, 40, 60, 80, 100 and 120 ng/ml. The height ratio of paroxetine versus dibucaine was used for the determination of the paroxetine concentration. Each of spiked saliva was processed as described previously.

### 5. Validation of the method

The recovery of paroxetine was determined at three different concentrations in blank saliva 40, 80, and 120 ng/ml. Saliva samples with the drug added at the above concentrations were analyzed according to the procedure proposed. The concentrations of these samples were calculated on the basis of calibration curves constructed from the data for the drugs.

To determine the intra-assay precision, aliquots ( $n=7$ ) of blank saliva containing the standard solution of paroxetine at concentrations of 40 and 120 ng/ml were analyzed by the method proposed. To determine the inter-assay precision, blank saliva containing the standard solution at the same concentration was analyzed on four consecutive days.

Nineteen patients with major depression disorder taking 10 to 40 mg/day of paroxetine were recruited. Ten to 19 were outpatients and 9 were inpatients. After obtaining informed consent, 10 ml of blood was drawn by venopuncture and saliva was collected with a salivette as previously reported.

Pearson's correlation was used to calculate the relationship

between the saliva and the plasma level of paroxetine. A P value less than 0.05 was assessed as statistically significant.

The institutional audit board gave us recognition for this study.

## RESULTS

As shown in Fig 1, the chromatogram of a blank saliva extract showed no peaks between 8.5 and 9.5 min. The retention time of paroxetine and dibucaine was 8.87 min and 9.26 min, respectively, as shown in Fig 2. The chromatogram of a saliva extract containing 20 ng/ $\mu$ l of a paroxetine and dibucaine is shown in Fig 3. The peaks of paroxetine and dibucaine in the chromatogram could be clearly detected without any concomitant peak. Paroxetine was detected in the saliva extract of a patient given 30 mg/day at the retention time of 9.0 min and the peak area of 0.53 V.s.

The calibration curve is shown in following linear equation (Fig 4). According to this linear equation, the concentration of paroxetine in his patient has been measured at 5 ng/ml. The recovery rate was 91.5%.

Table 1 shows that other drugs such as flunitrazepam, zopiclone, rebamipide, nizatidine, rilmazafone hydrochloride and etizolam taken by the patient did not interfere with the paroxetine or dibucaine.

Detection at 205 nm, solvent extract with hexane and isoamyl alcohol (99:1, v/v) and the mobile phase, 0.05 mol/L sodium phosphate buffer, pH 5.0, and acetonitrile (A 30:70, v/v; B 60:40, v/v) yielded saliva residue free from interference and showed high values for validation of the method, presented in Table 2, and guaranteed highly precise results.

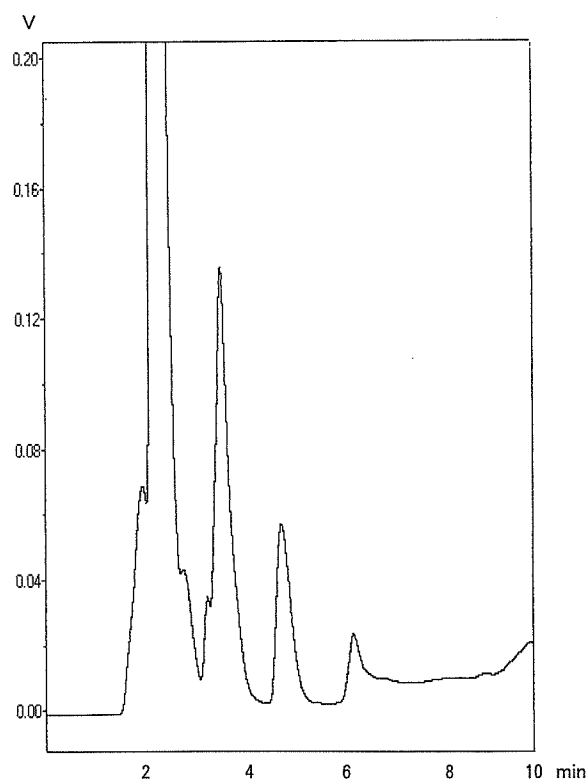


Fig. 1 Chromatogram of a blank saliva extract.

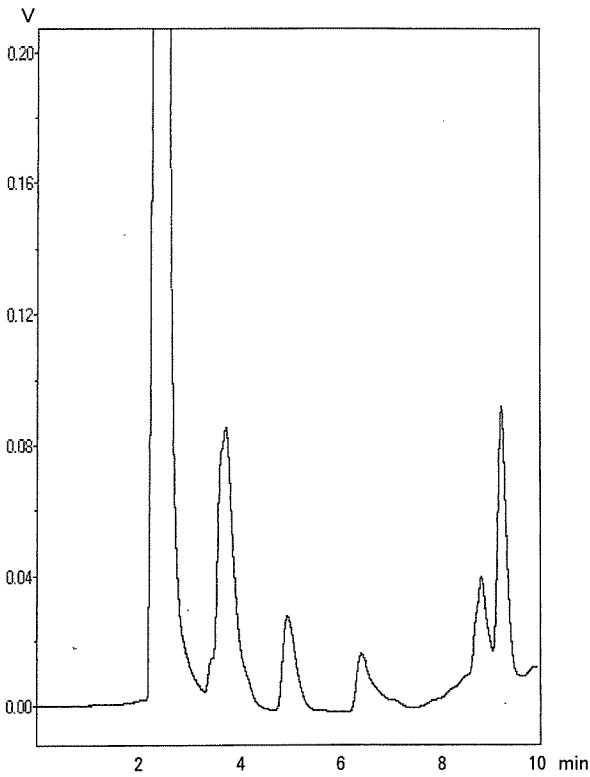


Fig. 2 Chromatogram of a saliva extract of paroxetine at the concentration of 20 ng/ml.

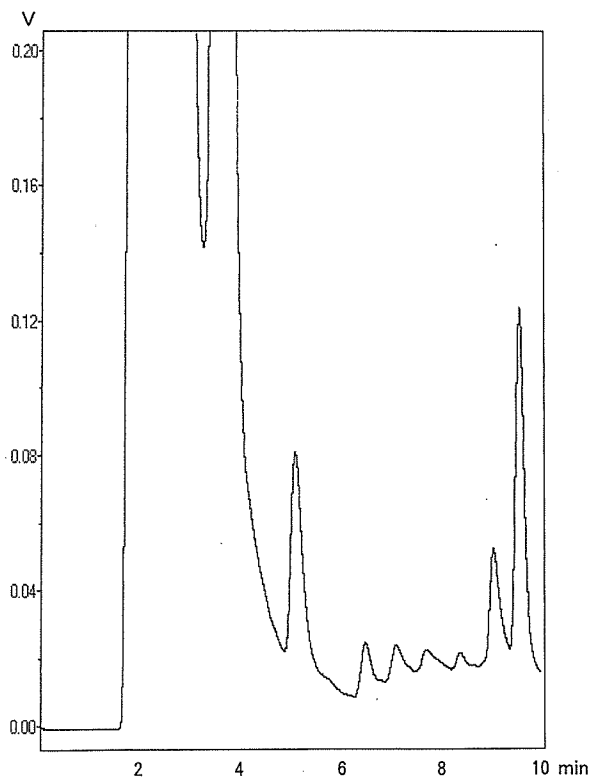


Fig. 3 Chromatogram of a saliva extract of a patient given 30 mg/day of paroxetine.

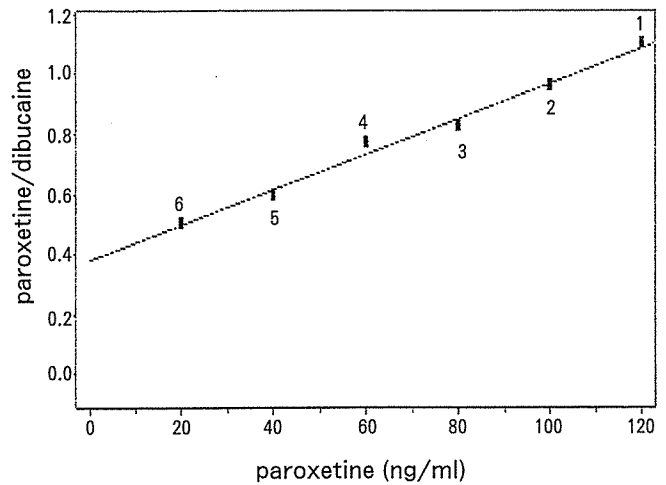


Fig. 4 Calibration curve  $Y=0.006X+0.37$ . Y: peak-area ratios (paroxetine/dibucaine). X: concentration of paroxetine (ng/ml).

Table 1 Retention time of other drugs besides paroxetine which a patient was prescribed

Durg	Retention time (min)
Flunitrazepam	15.02
Zopiclone	4.33
Rebamipide	3.33
Nizatidine	3.73
Rilmazafone hydrochloride	7.80
Etizolam	12.56

Table 2 Parameter in validation of the method for analysis of paroxetine and dibucaine in saliva samples

Mean (ng/ml)	Precision	
	n	cv (%)
Intra-assay	40	4.3
	120	2.3
Interassay	40	3.3
	120	2.0

The saliva level of paroxetine was  $32.0 \pm 13.0$ , and the plasma level of paroxetine was  $175.3 \pm 128.5$ .

Furthermore, the saliva level of paroxetine in patients with depression taking 10 to 40 mg/day of the drug was significantly correlated with the plasma level of paroxetine in each patient ( $r=0.617$ ,  $P<0.004$ ,  $n=19$ ).

### DISCUSSION

There have been many reports about the measurement of paroxetine concentration in breast milk (Spigset et al, 1996; Begg et al, 1999; Hagg et al, 1999; Misri et al, 2000; Stowe et al, 2000; Hallberg et al, 2005). Öhman et al (1999) reported that excretion of paroxetine in breast milk was 25 ng/ml after taking 20 mg/day of paroxetine. The concentration of paroxetine in breast milk was highest at 8 hours after

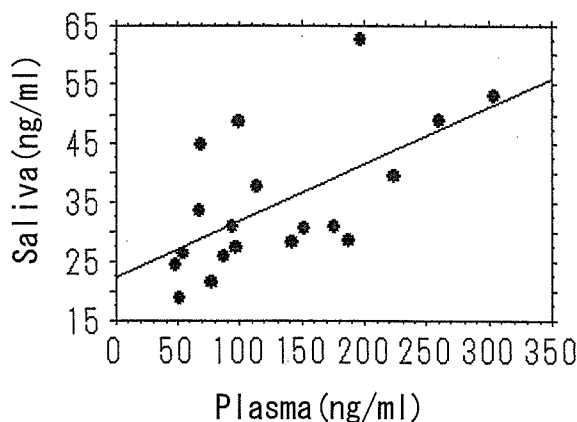


Fig. 5 Correlation between saliva and plasma.

paroxetine intake. The condition of this study was changed from breast milk to saliva. Extract of paroxetine in saliva was 5 ng/ml at a paroxetine intake of 30 mg/day.

Drugs in saliva such as phenytoin and phenobarbital have been detected by arranged UV spectrophotometry (Honda et al, 1978). However, it has not been popular to determine the concentration of drugs in saliva. In this study, we have measured paroxetine concentration in human saliva, which is a noninvasive way to take it from the patients. This is a first report to measure the saliva concentration of paroxetine in patients with depression.

The original mobile phase was used only once in HPLC. But for our new mobile phase two different types of liquid consisting of 0.05 mol/L sodiumphosphate buffer and acetonitrile (A 30:30%, B60:40%) were invented in this study.

These were extremely useful for the present study to detect extracts of paroxetine in saliva by the HPLC method. Furthermore it was important to avoid fluorescence detection. Both the easy way to collect the sample and the low cost may facilitate the measurement and ascertainment of the concentration of paroxetine in saliva more quickly and more frequently in order to provide suitable antidepressant medications.

High linearity was found between the saliva and the plasma

level of paroxetine in patients with depression. These data indicate the saliva level of paroxetine could be a useful marker to predict the plasma level of the drug.

It is necessary to collect a lot of case studies for such subjects to investigate and discover the correlation between concentrations in saliva and amounts of SSRI drug intake which causes serious adverse effects.

#### REFERENCES

- Begg, E. J., Duffull, S. B. and Saunders, D. A., Buttimore, R. C., Ilett, K. F., Hackett, L. P., Yapp, P. and Wilson, D. A. (1999) Paroxetine in human milk. *Br J Clin Pharmacol*, 48: 142-147.
- Foglia, J. P., Sorisio, D., Kirshner, M. and Pollock, B. G. (1997) Quantitative determination of paroxetine in plasma by high-performance liquid chromatography and ultraviolet detection. *J Chromatogr B*, 693: 147-151.
- Gupta, R. N. (1994) Column liquid chromatographic determination of paroxetine in human serum using solid-phase extraction. *J Chromatogr B*, 661: 362-365.
- Hallberg, P. and Sjöblom, V. (2005) The use of selective serotonin reuptake inhibitors during pregnancy and breast-feeding: A review and clinical aspects. *J Clin Psychopharmacol*, 25: 59-73.
- Härterter, S., Hermes, B., Szegedi, A. and Hiemke, C. (1994) Automated determination of paroxetine and its main metabolite by column switching and on-line high-performance liquid chromatography. *Ther Drug Monit*, 16: 400-406.
- Honda, Y., Nishihara, K., Kouda, Y., Saitou, Y., Nakagawa, F. and Tamura, Z. (1978) Reliability and usefulness of salivary phenytoin and phenobarbital concentrations. *J Clin Psychopharmacol*, 7: 309-319.
- Misri, S., Kim, J., Riggs, K. W. and Kostaras, X. (2000) Paroxetine levels in postpartum depressed women, breast milk, and infant serum. *J Clin Psychiatry*, 61: 828-832.
- Öhman, R., Hägg, S., Carleborg, L. and Spigset, O. (1999) Excretion of paroxetine into breast milk. *J Clin Psychiatry*, 60: 519-523.
- Spigset, O., Carleborg, L., Norstorm, A. and Sandlund, M. (1996) Paroxetine level in breast milk. *J Clin Psychiatry*, 57: 39.
- Stowe, Z. N., Cohen, L. S., Hostetter, A., Ritchie, J. C., Owens, M. J. and Nemeroff, C. B. (2000) Paroxetine in human breast milk and nursing infants. *Am J Psychiatry*, 157: 185-189.
- Zainaghi, I. A., Lanchote, V. L. and Queiroz, R. H. C. (2003) Determination of paroxetine in geriatric depression by high-performance liquid chromatography. *Pharmacol Res*, 48: 217-221.